

後 記

2024年は、元旦夕方の能登半島地震の緊急速報から始まりました。本学の位置する神戸でも、長い横揺れが東日本大震災の身体の記憶を呼び覚まし、またその後目に飛び込んできた被災地の倒壊家屋や火災のニュース映像は、29年前の阪神・淡路大震災の生々しい記憶を呼び戻しました。今回は、直接大学が被害を受けることはありませんでしたが、帰省していて被災した学生たちがいます。冬休み明けの授業が始まった今、今日あるものが明日もあるとは限らないという、いのちあることの奇跡を改めて実感しながら、スタッフは相談業務にあたっています。

ふりかえると、2023年度は学生相談室にとって大きな節目となる年でした。前年度末をもって、本学の震災復興のシンボルの一つであったカウンセリングセンターが廃止され、その一部門として活動してきた学生相談室は、新たに設置された学生支援機構の下で、学生相談センターの一部門となりました。副学長が統括する学生支援機構は学生生活支援センター（旧学生部）と学生相談センターから構成され、機構の事務局が横断的に両センターの事務を司るという方式です。学生相談室の活動自体は変わらず同じ場所で続けられていますが、建物内に専任職員が配置された事務局がなくなり、教職協働の体制を新たに構築し直すことが求められる1年でもありました。

学生の利用状況という観点からは、今年度はコロナ禍の活動制限がほぼ撤廃され、授業が原則全面実施となったため、コロナ禍の2年目、3年目に比べると利用件数自体は漸減して落ち着いてきた様子がみえます。それでも、コロナ後に向かって次々と変化する環境への適応困難を抱える学生の相談が目立ち、学生相談センターのもう一つの部門であるYOUステーション（障がいのある学生への修学支援室）と連携しながら、修学環境の調整にエネルギーを注がねばならない事例も増えています。3年にわたったコロナ禍が学生の心の成長に及ぼす影響については、今後も長いスパンで目を向けていかねばならないと感じているところです。

さて、改組により新たに定めた編集内規と執筆要項に基づき、本紀要（通算第31号）を発行できる運びになりました。内容は、これまでのものと同様、講演、論文、報告、資料という構成になっています。講演録の掲載を快諾してくださった京都大学の村田淳先生には、この場を借りて感謝を申し上げます。論文は、学生相談にサブカルチャーを活かす観点からの論考、学生相談カウンセラーのアイデンティティ形成をめぐる考察、学生相談の今後の展開について社会的処方との関連から検討した論考の3本となっています。ご高覧の上、忌憚のないご意見をいただけましたら幸いです。

末尾になりますが、学生相談室の活動にいつも温かい支援をいただいている学生支援機構事務室の小花室長、松岡課長、粕井さん、そして学内外の関係者のみなさまに心から御礼を申し上げます。

2024年1月11日

（スタッフを代表して）高 石 恭 子